

鳥を野に放つ

—— 言語学習環境論とは何か ——

2002年3月ドイツ語圏日本語教育研究会
ベルリンシンポジウムから

細川英雄

キーワード

総合活動型日本語教育 問題発見解決学習
日本事情 言語文化 日本語教育

はじめに

- 1 言語教育における言語と文化を統合する立場
 - 1-1 日本語教育の中の日本事情
 - 1-2 言語A・文化Aの立場
 - 1-3 言語Bの立場
 - 1-4 文化Bの立場
 - 1-5 言語と文化を統合する立場
- 2 総合活動型日本語教育とは何か
 - 2-1 教育活動の位置づけ
 - 2-2 具体的な対象と目標
 - 2-3 問題発見解決学習の3つのポイント
 - 2-4 教室活動の問題点
- 3 言語都市設計者としての役割

はじめに

今回のシンポジウムでは「グローバル化時代の日本語教育・日本事情教育——理論と実践」という大きなタイトルの中で、「言語学習環境論」というコンセプトをめぐって、ことばと文化の統合ということを考えてみた

いと思います。本日の「生きた鳥を野に放つ教育理念」というサブタイトルは、1999年に刊行した拙著『日本語教育と日本事情——異文化を超える』という本の「あとがき」によるもので、本研究会の山田頼子会長がつけてくださったものです。

私が日本事情というものに関わりはじめてから17、8年になりますけれども、今日私がお話することは、その中のいろいろな試行錯誤の中で考えたことで、私のポジションとして今ここにいるということをお話しします。もちろんそれは私のポジションですから、ここに参加なさった一人一人の問題とは距離があるのは当然のことですね、しかし、それに関しては私の立場に立たないものは日本事情に関わってはならないとか、そういうことを申すつもりは全くございません。日本でも有名なドイツの教育思想家ドルフ・シュタイナーが「私のいうことを信じる必要はない、ただ、私のいうことに耳を傾けてほしい」ということを書いています。今日は、そういう立場でお話をしたいと思っています。

今日は日本事情では何をどのように教えるのかということが一番大きなテーマになりますが、もう一つの隠されたテーマが「ことばと文化の統合」ということです。ですから、日本事情を考えるということは日本語教育の中で日本事情というものをどう引き受けるかという問題ですね。もちろん、日本事情というクラスをどういうふうに教えるか、どういう教科書を使うかということも関わりますけれども、それ以前の問題として日本語教育の中で日本事情というものは一体何なんだ、日本語教育というのは、日本事情を抱え込んで、あるいは抱え込まずに、どのように、どこへ、何をめざしていくのかと問うことが重要であると私は考えています。

1 言語教育における言語と文化を統合する立場

1-1 日本語教育の中の日本事情

さて、具体的に日本事情の内容について入りたいと思います。

まず、日本事情という用語ですけれども、研究によれば戦前からすでに

あったことが指摘されていますが、実際に日本語教育の現場で使われはじめるのは1960年代の初めからなんです。昭和でいうと30年代になりますね。これは文部省令としての文書の中に、「日本事情」という用語が使われたことからはじまります。これが日本全国の大学学長宛に伝達され、さらに国立大学の講座設置科目名の一つとして「日本語・日本事情」という名称が使われることで一般に普及しました。それからすでに随分の時間が経っているわけですが、いまだに日本事情とは何かということについて明快な答えが出ているわけではないというのが現状でしょう。

私としてはこの日本事情とは何かという問題について実践しながら考えるという仕事の中で、日本事情を定義することは日本語教育全体を定義していかないと決着の付かない問題だと考えています。つまり、日本語教育の中で文化の問題をどういうふうに位置づけるかというところで議論をしないかぎり「日本事情」の問題は解決しないだろうというのが私の立場なんです。

、今日の発表レジュメは次のものを用意しました。OHPを使うかパワーポイントを使うか悩んだんですが、きわめて伝統的なものにしました。フランスの、ある教育学者のことばなんです、「形式は伝統、内容は革新」というのを今日の私のキャッチフレーズとしたいと思いますので（笑）、どうぞよろしくお願いします。

「言語」と「文化」の捉え方と「総合活動型日本語教育」の概念プラン

〈巻末参照〉

1-2 言語A・文化Aの立場

さまざまな言語教育には、それぞれの立場というものがあります。言語をどう捉えるか、文化をどう捉えるか、その教育はなぜ行われるのか、そして、教育の対象は何か、方法はどのようなものか、それから、言語と文化ですから文化にとって言語とは何か、言語にとって文化とは何か、媒介

語を使うか使わないか、教材はどうするんだとか、教室の形態はとか、あるいは姿勢と言いましょか、態度のようなもの、それを分類して名前を付けるとどうなるのかとか、今までどういう経験があるかとか、そういうふうなことがポイントとして得られます。それを縦軸にして右と左に挙げました。そして、それを言語と文化という二つの面から両方に一番端という形になる言語Aおよび文化Aとして並べてあります。そして、さらにもう一つ中に入って言語Bおよび文化Bになります。で、真ん中にC、これが統合的立場としてのC、すなわち私の立場です。

そこで、文化の方から入りましょうか、文化Aの方を見ていただくと、右の端ですね、これは特にヨーロッパで行われているような日本学の立場です。つまり、日本という地域のある対象を捉えて、それを研究的な立場で考察するというものです。これは、広い意味で日本研究あるいは日本学と呼ばれているものです。この文化Aというものが言語教育にとってどのような関係があるかという視点によって、言語Aの方を見ていただくと、例えば日本語という言語はこういう構造を持っているというふうなことを説明する立場です。ですから、ここでは「は」と「が」の違いはどこにあるかとか、「てある」「ている」はどう使われるか、といった文法的な問題の説明をする、そうすると、なるほど日本語というのはいくつかの言語なのかと学習者は理解することができます。

ただ、一番大きな問題はそれをいくら教育されても、あるいは、その方法でいくら学習しても日本語という言語そのものを運用することはできないということです。これは日本語に限ったことではありません。例えば、日本の私の友人でドイツ語を大学で4年間習って、文章は辞書を引ながらならある程度読めるが、しかし一度も話したことがないという友人がいます。このように、ドイツ語はどんな言語であるかということが分っているけれども、ドイツ語を運用することはできないというケースが私たちの身の回りにはむしろ普通のこととしてあるでしょう。そういうことが日本語の場合でも世界中で問題になっています。ここで問題なのは、教室担当

者としての教師が自分の教室として何をめざすべきなのかという、その視点だろうと思います。ことばを理解するためには、まずその構造を知るべきだと考える立場はごく一般的にあります。だから、日本学の一部として日本語学を講ずるということは決して悪いこととは私も思いません。しかし、もし教室の目的が学習者のコミュニケーション能力獲得をめざすということであるならば、言語Aのような立場は大きな矛盾を抱えていることになります。多く言語Aの立場をとる時に、コミュニケーション能力の問題は横に置いておいて、日本語がどういう言語かということ解説する講義は、日本研究であったとしても、日本語教育と呼ぶには問題があると思います。コミュニケーション能力の獲得という意味で、両者には大きな溝がありますから。

1-3 言語Bの立場

次に、そのまま横にずれていただいて、言語Bを見てみましょう。言語Aに対して、ここでは明らかに知識として言語を教えるということからコミュニケーション能力をつけるというふうにフレームそのものが移っています。つまり、言語の目的は何かというと、やはり運用であると、運用とは何かというと理解と表現の往還関係であるということです。したがって、そういう理解と表現の往還関係、つまりコミュニケーション能力をここでつけていくことが必要だという立場が言語Bの立場だと思います。

ところが、ここで一つ問題があります。それはこの表の①「言語の捉え方」が言語を集団社会における対人相互作用として捉え、その社会の言語を学習し運用できるようにすることが言語学習であるという立場をとることです。これを考えていくと集団社会というコンセプトが一つのキーワードになります。というのは、表の③番目の「目的」のところにある集団社会による言語の差異に注目し、その社会への理解・適応を図るためとあるわけですが、簡単に言うと、要するにソシユールがかつて定義したラングとしての社会制度としての言語というものを学習目的にしていることにな

ります。そうすると、その言語は例えば何百時間やったら、何十の文法項目を覚える、何百時間やったら何十の単語が分り、文字も読み書きができるようになる、というように学習目標が設定され、その学習目的としての内容がきちんと煉瓦を積むようにして積み上げられていく。それは学習者にも示され、教師もそれを学習者に予備知識として与えつつ、その知識をどう運用させるかということに目標が置かれることになります。したがって、非常に簡単に言うならば、この学習の目標は語彙と文型を教えること、ということになります。しかし、それでは言語が使えないということは、これはもうAの反省から分っているのですから、これに場面的な状況が必要だということになります。だから、これだけの語彙でこれだけの文型を使うためにはどんな場面が必要だという考え方に至ります。例えば、第30課日本語学習テキストの内の第5課までには過去の表現とそれから例えば日常的な買い物等のような場面がある。そうすると、この過去の表現、昨日何をしましたかというところで、身の回りの状況を説明させるような表現を使わせる場面を設定するということになります。たとえば、昨日は何をしましたか、朝起きて歯を磨きました、それから手を洗いました、それから洋服を着ました、というような。そうするとしかし、今度は日本語として自然でない、だから、複文を使った方がいい。手を洗って服を着てシャワーを浴びてと、どんどんつなげて（笑）、ああ、ごめんなさい、シャワーを浴びて洋服を着る（笑）ですね、要するにそういう動詞をこうつなげていくというのは、子供のような表現になってしまうから、もう少し「て」形の使い方を学ばなければ、というふうになるわけですが、ここに問題はないでしょうか。

つまり、こういう質問する教師の側が「あなたは昨日何をしましたか」と聞く時に、ここでは何を期待しているのでしょうか。それは先週教えた語彙がちゃんと入っているかどうか、入っているという表現は非常に職業的な用語だと思いますけれども、文法項目がちゃんと入っているかということを確認するためにそのような質問するわけです。だから、「昨日あな

たは何をしましたか」と教師が聞いて、学習者が「昨日のことは覚えていません」と言ったらそれで終わりですね。ここでは今、きわめて単純化したレベルで言いましたので、ちょっと誤解を招くかも知れませんが、言語Bの立場はどうしてもそのようなところで止ってしまいます、止まらざるを得ないんです。それで、こうした状況を反転させて場面を中心にする立場を仮にとったとします。たとえば、郵便局に行って何かを自分の家族に荷物を送るということをしませうか。そうすると、それはあたかも郵便局という具体的な場面での体験学習のように見えますけれども、結局は、そうした学習そのものが語彙や文型の知識を確認するために単にそういう場面で調整しているだけであって、決してその本人の体験学習になってないと私は考えるのです。以上、言語Bのところをもう少し詳しくみるといろいろな問題が立ち現れてきますが、時間の関係で省略します。そして、私自身の問題として、今まで私が考えてきた言語教育というのは、この言語Bの立場にあったことを告白します。

1-4 文化Bの立場

そこで、今度は文化Bの方へ目を転じてみましょう。これは今までの日本研究的なものから、もう一步進んで、もっとアクティブな日本、現在の日本を、というところに目を向けています。それは学習者が知りたいこと、学習者のニーズに合わせた問題を考えていこうということになっているのだと思いますけれども、それは言語Aが言語Bに変容したように、文化Aも文化Bに変容してきたわけです。もちろんこれはコミュニケーション能力を付けるという前提の基に文化と言語というのは相互に近寄ってきたというように考えることが出来るだろうと思います。で、もちろんだからと言って、文化Aの日本学が必要がないとか、そんなことを申し上げるつもりは全くございません。歴史学という分野、社会学という分野、人類学という分野、このように様々な分野があって、それはそこで学問領域として成立しているわけですから、それ自体を云々するということではあり

ません。しかし、人がそれを学ぶということと、日本語の運用能力を付けるということにおいては、文化Aの立場だけではもはや対応できなくなっているということですね。したがって、そこが文化Bの立場にだんだん変容していくわけです。これは言語Aが言語Bに変容したのと同じ、つまり、コミュニケーションという能力ということがキーワードになると考えられます。

では、文化Bはどのような立場なのでしょう。実は私も1994年までこの立場におりました。1995・96年と迷いつづけて97年から私はこの文化Bの立場を捨てました。その理由はこれからお話しします。

文化Bの立場というのは社会相対的な立場で一般に言われているものですが、ここにあるように文化を集団社会における対人相互作用として捉え、その社会の人間の行動・思考の様式を学習することが「文化学習」であるとします。つまり、ここで典型的に言われるのは日本人の行動様式とは何か、日本人の思考様式、ものの考え方とは何かというものです。そして、ここでは現代の様々な事情や状況あるいは問題を提示することで、学習者にさまざまなことを考えさせる、というような教室が設定されるわけです。

しかし、ここに一つの大きな問題があると私は考えます。それは文化というものを集団の結果というふうに捉える、集団社会の産物というふう捉えることです。ここでは文化とは何かというような問題を今、検討する時間はありません。ただ、簡単に言いますと、この文化Bの立場では、人間を集団社会の産物として捉えてしまうということなんです。たとえば、日本に来る留学生のほとんどがその動機として、まず日本語と日本文化を学びたいというんですね。そこで、日本文化って何ですかというと、日本人の考え方を知りたい、日本人の行動様式を知りたい、あるいは日本語を上達して日本人のように話したいというんです。そこでまた、その日本人はどのような日本人なのかと私は聞きます。そうすると、本人は大変戸惑った顔をします。

つまり、一体日本人とは何か、あるいは日本社会とは何かというその文化の線引き、つまり文化と文化のどこに線を引くのかということが非常に問題になるわけです。たとえば、現代の社会に関する情報は、テレビやインターネットその他メディアによって世界のどこにいても今やいくらでも手に入りますが、現代的な状況あるいはメディアによる様々な現象、それを知ることが日本事情を知ることであり、日本文化を教えることなのだと考えていいのだろうか、という問題なんです。ここに潜んでいるのは、日本人の行動様式や思考形態を教えようということ、私たちはどうも日本人という一括りの集団類型化ということを行っているのではないかと考えられるからなんです。そしてこのことは、先ほど言いました人と人とのコミュニケーションということを考えるとき、こうした集団類型化が及ぼしている弊害というのは計り知れないと恐ろしくなるんです。

1-5 言語と文化を統合する立場

そこで、私は文化B・言語Bという立場から、さらに文化と言語を一つにするための統合的な立場を立ちます。これが統合的立場としてのCです。それはどういうことかと申しますと、ここでは文化というものが社会に属するのではなく、個人に属するものだというふうに考えます。ですから、これは個人能力的立場ということです。もちろん、集団としての社会を否定して、それはもう要らないというわけではありません。ただ、見方が違うということです。ここでは文化を個人のものとし、「個の文化」という言い方をします。とくに、この「個の文化」は、個人の場面や状況に認識能力として象徴的に現われてくると考え、その能力こそが文化能力、つまり文化リテラシーであると定義します。したがって、ここでは、その個人が社会の中で他者としての個人との関係を取り結ぶこと自体が文化学習なんだと捉えることになります。

ですから、ここでは、社会の中の他者との対人相互関係を取り結ぶ能力を獲得させること、これが一番重要になります。簡単に言えば、社会の中

で個人がどのように自己表現ができるか、ということなんです。以前は、これを自己実現と呼んでいましたが、自己実現というと、何か決められたきちんとした目標があって、それを達成するというイメージがありますよね。ここではそういう意味ではなくて、他者との関係を築き、自分の居場所を確認するということですから、自己実現という言い方はふさわしくないように思うのです。つまり、自己表現とは、自分の居場所を確かめるといふか、私はここにいてよかったな、私はここにいてハッピーなんだと、そういうようなことですね。この自己表現をサポートしていくこと、これが教室の仕事だと考えるわけです。このことは個人の文化能力を高め、それによって自己表現を促すこと、これが今日のお話のテーマである言語学習環境ということと繋がります。そして、その時に言語学習ということは、それはもう同時に文化学習なんだ、つまり、本物の言語学習というのは文化学習なしにはありえないんだということになるわけです。つくられたバーチャルリアリティー、仮想現実の中での、語彙や文型の学習は本当の言語活動ではないという前提に立つことになるわけです。

上智大学の吉田研作さんの使った比喻ですが、金魚鉢と大海という比較があります。今までの言語教育は、まず金魚鉢の中で育ててから大海の中で生きられるようにするという考え方だった。ところが、最初に金魚鉢に入れて大海での危険要素をすべて情報として与えておく、こういう発想そのものが大海で生きる力を奪い取ってしまうのではないかということなんです。そうすると、じゃその大海で生きられなくて金魚鉢でしか生きられない人はどうするんだという、こういう質問が必ず出るんです。でも、我々が生きるということは、すでに大海にいることなのではないか、逆に金魚鉢を想定すること自体が不自然なのではないか、こういう立場をとることになります。これは先程ベルリン自由大学副学長のブラウン先生のお話にもありました、母語と第二言語の統合という問題と重なりますけれども、母語であろうと第二言語であろうと、言語を使うということは常に大海の中で、つまり、本物の人間関係の中で言語活動を行うということ、コ

コミュニケーション活動が出来るということ、それは言語学習であると同様に文化学習でもある、その意味で言語と文化は引き離すことが出来ないという、こういう考えです。そして、ここで最も重要なことは、学習者の考えていることをどう引き出すかということであって、既定の教材を一方的に与えるという立場には立たないということになるのです。

このような立場については1990年代から、早いところでは倉地暁美さんが1980年代後半に書いています。これは非常に先進的な論文ですが、残念ながらその後倉地さんは日本語教育そのものとは大分距離を置いてしまっています。1990年代に入ってからそういうポジションを持った研究論文や実践が少しずつ出てきます。但し、これは理論としては分るけれども、実践としては非常に難しいということをいろいろな人が言っています。したがって、そこでどのような実践をするかということはまだ試行錯誤の中にあるという段階でしょう。私自身の実践もその例に漏れないわけです。ここまでが私の提案する総合活動型日本語教育へ至る基本的な考え方と立場の説明です。

2 総合活動型日本語教育とは何か

2-1 教育活動の位置づけ

それでは、具体的な実践の問題についてお話ししたいと思います。

この総合活動型言語教育の位置づけですけれども、基本的には学習者一人一人が自分の何かを考えさせ、その考えていることを表現させる学習のことです。先程、教材はないと申し上げたんですが、ここでは、教材ではなく、むしろ教室素材というふうに申し上げた方がいいかも知れませんが、教室素材としては学習者の考えていることが教室素材になります。つまり、学習者は考えていることが一人一人全部違いますので、違ったものが教室の中に存在し、それをどうやって相互のやりとりによって交換し合うかというプロセスそのものが教材になるという考え方です。簡単に言えば、「ある一定の内容や構造を教授」という方向から「学習者自身

の考えていることをどのように引き出すか」という方向にこの教育そのものが変化し、先ほどの総合活動型日本語教育の理念によって、教材中心の読解型から学習者の自身の自己発信表現型というふうに教室活動のめざすものが変わることになります。

そのためには、学習者が主体的に表現しなければならない、そのためには何が必要かということも問題になります。当然そこでは、聞く・話す・読む・書くという、いわゆる四技能がフル稼働しなければならない、聞くだけ、読むだけ、話すだけではコミュニケーションにならない。それはつまり、四つの領域がすべて大車輪のように様々に複雑に絡み合って重層的に回転すること活性化すること、それがこの総合活動型の日本語学習なんだということです。そういう意味で、この四つを総合したという意味でも確かに総合なのですが、ただ四つを総合したから総合というのではなくて、さらにそれを先程のブラウン先生のお話にもあった全人格的な形のやりとりということが必要とされるということです。

2-2 具体的な対象と目標

さらに、これには具体的な目標というものがあつたんです。郵便局に行つて、自分の国に小包を送つてみましょう、そういうのではダメなんです。自分の本当にやりたいことを提示してもらわなければならない。やりたいことがないという場合は、やりたいものがないのはなぜかという問題になるんです。そういうことを、きちんとクラスの皆に宛てて、つまり一つの共同体の中でそれを提示してもらつたということなんです。これが当面の具体的な対象と目標になるんです。それは、ただ好きなことを好きなようにやれという意味ではありません。教室という共同体の中で、自分の活動をどういうふうにメンバーに提示し、どのように議論していくか。この枠組みは、教室責任者としての担当者が提示すべきだと思います。

各自の具体的な対象と目標を前提として提示されることによって、その問題が発見され、次に解決されていくプロセスがあります。そして、最終

的にその問題が何らかの形で収束を見ます。それは一人一人の学習者が納得する形で進行していくわけですから、当然、それにはある達成感が生じます。この達成感を期待するというのがこの教室活動にはとても重要です。先程も申し上げましたけれども、それは教師が設定したバーチャルリアリティー・ゲームではなく、現実にその学習者自身が自分の明確な意思を持ち、それを確信する、そういう場としての言語学習の場、それをつくることが言語教育だということなんです。当然それは学習者一人一人の個の表現、つまり一人一人の表現を持つということに繋がります。つまり、みんなが同じことをしなければならないということではないですね、一人一人違っていいんだと、違っていたら違っていいということを表現した上で、当然のこととして他者と関わっていく。そこで、一つの達成感のあるような仕事をしようというのがこの教室活動のおおまかな枠組みです。私の場合はレポート集を作るという活動をしています。今、お返ししているのは、この秋2001年度の秋学期で行った最新のものです、この二月に出来上がったものです。「眠れない25人の「私」と熱い日本語」というタイトルがついていますけど、25人というのは一クラスの人数です。この25人の中の3分の1は昨年新しく立ち上げた大学院日本語教育研究科の学生が実習生としてここに参加しています。ここで実習生は学習者と一緒にレポートを書くということを4ヶ月、15週にわたってやります。彼らのレポートも留学生と一緒に印刷されています。

こういうレポート集をとにかく学期の終わりに公開する、インターネットにのせる、世界中の人が見る。日本語学習している人達が注目するというような形にしますので、無責任に勝手なことを書くわけにはいかない。こうしたことは、学習者にとっては自分として責任のあるものを想定していかなければいけないこととなります。これが当面の課題と目標です。内容は見ていただければわかるように、自分が今一番興味の持っていること、ただそれだけです。それについて書いていくという作業です。

2-3 問題発見解決学習の3つのポイント

以上が、総合活動型言語教育としての問題発見解決学習、これは今回のワークショップのテーマの一つになっています。この問題発見解決学習というところが重要なポイントです。この「レポートを書く」という活動には三つのポイントがあります。

- ① 「私」をくぐらせたテーマ設定→ ステレオタイプの剥ぎ取り
- ② インタビュー・原稿の推敲・クラス内ディスカッション・相互評価→ インターアクションと自己相対化
- ③ 動機と結論の一貫性による他者説得の論理獲得→ 思考と表現の往還による言語活動の活性化

まず①私をくぐらせたテーマであるということ。簡単に申しますと、対象を自分の問題として捉えるということです。誤解しないでいただきたいのですが、これは自分の私生活を語るということではありません。私も自分の私生活ではあまり語りたくないことがありますしね。もちろん、個人のプライバシーを侵害するものでもありません。ここで、「私をくぐらせる」ということは、対象を自分の問題として捉えること、つまり、一般論として語らないということです。例えば、日本が好きと言った時に、何で日本が好きかという、日本で仕事がしたいんです。それじゃ、なぜ日本で就職がしたいですかという、それは日本経済は発展しているからです、というような答えの場合、ここには、なぜ自分は日本が好きかという固有の問いがありませんね。すなわち対象を一般論としてしか捉えていないわけです。そうであれば、別にその人が書かなくてもいい問題でもあるわけです。日本経済の概説が知りたいなら、図書館にいくらでも参考書があるでしょう。学問、研究、何でもそうだと思いますが、結局、自分の問題としてそのテーマがきちんと把握されていないかぎりロクなものにはならないわけです。これはある意味ではアカデミック・ストラテジーに繋が

ることではないかと思います。ですから、ここでテーマを決める時には、私の問題として捉えるという姿勢が非常に重要だと考えています。

そして、②のインターアクションがこの教室では非常に重要になります。インタビューであるとか、原稿の推敲、クラス内でのディスカッション、それから、最後に行く相互評価というような問題がそれです。これは、すべてインターアクションとそれによる自己相対化というような問題に連続する一連の活動です。それから、もう一つは③他者を納得させる論理ということ。社会における他者を説得し納得させるためにはどうしても論理が必要です。この意味は、ただ論理的であればいいというだけのことではなくて、他者を納得させることができるかどうか、他者への説得のために必要なのは、やはり他者と自己との共通の論理でしょう。その場合は、レポートとしての動機と結論の一貫性というものが問題になります。つまり、動機で述べているものと結論で言っていることが矛盾しては他者は納得しない、つまりいいレポートではないということです。もう少し深いところで考えると、この問題は、思考と表現の往還だというふうに考えることができます。つまり、考えていることと表現とをいかに往還させ、そこで、その言語活動、厳密にいうと言語文化活動ですが、その言語文化活動をいかに活性化させるかということがたいへん重要だと思います。ですから、自己の問題として捉える、それから、インターアクションを取り入れること、そして他者が納得する論理を、という三つがこの活動の大きな柱になります。

2-4 教室活動の問題点

こうした活動を総称して総合活動型日本語教育と私は呼んでいます。総合活動型という、いわば外側からみた活動の様子を言う時であり、質的な面でどんな活動をしているかという、ある問題を発見し、解決していくか、つまり問題発見解決学習ということになります。自らがテーマを設定すること自体が問題の発見であり、それを自分の問題として他者との

インターアクションの中で解決していく作業ですね。

この問題でつねに話題になるのは、ルールブックが作りにくい、マニュアルが作りにくいということです。マニュアルを作ってしまうと、そのマニュアルを通れば楽にできるかというところというわけには行かないのが問題です。むしろ、一人一人の担当者が自分のポジションをしっかりと持って、自分のポジションから発信していく、そういう姿勢が必要です。いわばマニュアルは一人一人のためにあるということになります。自分のマニュアルは自分でつくるしかないということになります。ですから活動の内容とか方法とか考え方がどんなものがあるかということは、もちろん今これから考えて行かなければいけないし、それも固定させるのではなくて、自分の問題としてそれを常に考えつづけていくという点で常に流動的なものだけということです。そして、最後に重要なことは評価のことですね、つまり、点数をどうするかという現実問題なんです。ここでは、評価というものを何か客観的なものによって、それに預けるという評価をせず、あくまでも、一人一人が自分の判断、自分の基準をしっかりと持って、その合意を形成していくという考え方に立ちます。やや分かりにくいかもしれませんが、担当者は評価についての権限を放棄するということも考えられます。そういう過激な評価方法ですが、それを私は合意形成としての評価というふうに呼びたいと思っています。つまり、評価は客観的でならなければならないという思い込みが教室の活性化を妨げているというのが私の立場です。この場合の客観的というのは、とにかく数値化して、それをもとに学習者を序列化しようという考え方を指しています。評価というものは、常に主観的なものでしかない、その主観的なものなんだけれども、合意形成をすることによって、我々は納得し合うことができるし、そこで合意によってそのクラスでの共同体としての達成感も得られるのだというのが私の考えです。

3 言語都市設計者としての役割

最後に、私の考えていることを簡単にまとめます。まず、こうした言語教育というのは一体なにをめざすのかということ、コミュニケーションにおけることば、この関係を活性化させることだということです。先程の述べました、全人格的な言語コミュニケーションということです。

もう一つは言語教育における教室活動のあり方です。私は言語教育における教室活動とは、言語コミュニケーションによって実際に自分の目の前にいる他者との関係を見直す作業だと考えています。その場合に、集団類型的文化観をいかに超えるかということ。そのことは、対象と自分との関係を考えることであり、すなわち自己相対化の問題と繋がります。なぜなら、他者を説得するために、他者への説得のための自分の立場、自分のポジションというものを確立しなければならない。もちろんそれは固定的なものではなくて、かなり流動的なものです。しかし、私が私の立場を語らなければ、他者も語ってはくれないのです。ですから、今日、私が私のポジションを話しているのも、他者としての皆さんとのインターアクションを願うことによつてのことなのです。そして、それが結局は他者との共生、そういうことに結びつくと思はれています。

そして、最終的には、教室という空間を言語都市と見立て、その言語都市としての環境をどのようにつくっていくかということ、つまり言語都市設計者としての自覚が担当者に求められると思います。そのためには文化の境界を、特定の国家とか地域とかのところで求めずに、いわば世界中どんなところでも暮らすことが出来るというやや比喩的な言い方ですけれども、あらゆる状況に対応することが出来る強固で柔軟なアイデンティティーとしての「個の文化」が必要だというのが私の考え方です。

こういうことを考えていくためには、実践から研究へ、つまり、既成の研究を何か実践に応用するという立場ではなくて、自分の実践の中のさまざまな発見や疑問から実践への問題意識を持つことからはじめ、その研究を軸にさらに自分の新しい実践へと展開していくというような実践、それ

が出発点であると私は考えます。ですから、教室活動というのはどこかの教室のいいとこ取りをするのではなく、やはり自分にしか出来ない教室活動をめざすべきだろうと思います。このように考えていくと最後に、これは本当に一番最後ですが、日本語教育というものは日本語学の応用分野であるという考え方は捨てていくべきだろうと考えます。むしろ日本語教育とは教育学の一分野であると思うからです。教育学とは例えば教育哲学とか社会教育学とかの領域がありますが、その中で言語教育学というのを位置づけ、その中に日本語なら日本語教育学というものがある、そしてそれは母語を対象とする場合と、第二言語を対象とする場合の二つがある。ただ、その分かれ目は決して固定的なものではなく、きわめて流動的なものであるというのが現在の私の立場です。

ちょうど時間になりましたので、これで最初の報告を終わらせていただきます。大急ぎの展開で十分に私の考えていることをお伝えすることができたかどうか本当に不安ですけれども、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

関連文献

- 細川英雄 『日本語教育と日本事情——異文化を超えて』（明石書店、1999・10）
—— 『日本語教育は何をめざすか——言語文化活動の理論と実践』（明石書店、2002・1）
『「総合」の考え方と方法』（早稲田大学日本語研究教育センター、2002・3）
吉田研作『外国人とわかりあう英語——異文化の壁を超えて』（筑摩書房、1995）
「21世紀の「日本事情」」第4号（くろしお出版、2002・11）

【付記】 本稿は、2002年3月22日にドイツ・ベルリン日独センターで行われたドイツ語圏大学日本語教育研究会（テーマは「グローバル化時代の日本語教育・日本事情教育——理論と実践」）での基調講演「言語学習環境論——生きた鳥を野に放つ教育理念」の内容を、当日参加の張珍華さん（早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程）の記録をもとに原稿化したものである。ご招待くださったドイツ語圏大学日本語教育研究会および山田頼子会長に深甚の謝意を表するものである。

なお、この講演およびワークショップに関しては、下記のホームページに詳細を掲載した。合わせて参照いただければ幸いです。

URL : : <http://faculty.web.waseda.ac.jp/hosokawa/>

「言語」と「文化」の捉え方と「総合活動型日本語教育」の概念プラン

Perception of language and culture, concept plan of Japanese language education

Type	Language A 言語A	Language B 言語B	Overall view C 統合的立場C
View point	Tradition-valued view	Relative social view	Individual ability
Perception of language	Consider language as product of group society and consider to learn knowledge as [language learning]	Consider language as interaction in social group and consider to learn and use social language as [language learning]	Consider culture as ability to recognize states of individual. Hence, communicating with other individuals itself become learning its culture
Purpose	To understand, preserve and success of language as outcome of society	Observing difference of language of group society promotes understanding and adaptation to society	Obtaining ability to communicate with others promotes self-realization within its community/society
Subject	System and value of language	Behavior or application style by social language (including language learning of daily life)	As it becomes an individual's matter, it doesn't exist in definite shape
Method	Unilateral teaching as an information and knowledge	Perform activities that find society of oneself or others with linguistic difference in group society	Perform activities that urge self-representation as self-understanding ability
Relation with culture education	Being done as separately different act from culture learning	As factors like the community group, ethnic group or nations with the partial overlapping, the being emphasized as language differences	Learning a language equals to learning its culture, these two can always be taken as the equal actions
Mediation language	Use a mediation language to primary or intermediate level learners and use a learning language to advanced learners	Use a mediation language by case	Fundamentally learning language process only
Teaching material	Explaining about structure function of language	Social comparison material or record of daily life	What a learner is thinking becomes a material
Structure	Observe [language] as social outcome. Fixed/substantial learning Objective/philological	Observe [language] as behavior and thinking style in interaction Fixed/ Social interaction/ Objective	Culture as ability to recognize states of an individual usually exists only as mobile object. Relation with other individuals/subjective (recognizing states)
Attitude	Need of language information as value of social group	Need of mutual understanding and awareness that different thing by communication of different language as group society	No need of knowledge and information. Self-expression and agreement become important in relation with other individuals
Classification	Language essentialism	Language relativism	Language-culture overallism

Culture B 文化B	Culture A 文化A	Type
Relative social view	Tradition-valued view	View point
Consider culture as interaction in social group and consider to learn social behavior and thinking as [culture learning]	Consider culture as a product of group society and consider to learn information, knowledge as a [culture learning]	Perception of language
Observing different style of behavior and thinking of group society promotes understanding and adaptation to society	To understand, preserve and success of value as outcome of society	Purpose
Behavior and thinking style in society (including custom of daily life)	Value of social tradition and property	Subject
Perform activities that find society of oneself or others with cultural difference in group society	Unilateral teaching as an information and knowledge	Method
As factors like the community group, ethnic group or nations with the partial overlapping, the being emphasized as social differences	Being done as separately different act from language learning	Relation With culture education
Use a mediation language by case	Use a mediation language to primary or intermediate level learners and use a learning language to advanced learners	Mediation language
Social comparison material or record of daily life	Explaining about literature, history, philosophy, economy etc.	Teaching material
Observe [culture] as behavior and thinking style in interaction Fixed/ Social interaction/ Objective <small c>	Observe [culture] as social outcome. Fixed/substantial learning Objective <Large C>	Structure
Need of mutual understanding and awareness that different thing by communication of different culture as group society	Need of knowledge and information as value of social group	Attitude
Culture relativism	Culture essentialism	Classification

(本表の英訳には、全映宣さん（早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程）の協力を得た。)